

## 北魏の帝室と仏教

横井克信

皇帝の力が強い専制政治の中国に於いて、外来の宗教である仏教がその勢力を伸張していくためには、皇帝権力に依存して行かねばならなかった。その象徴とも言えるものの一つに、隋唐代に於いて、発展した内道場の制があげられると思う。北朝に於ける内道場の記述として、『大宋僧史略』巻中には、「魏大武皇帝始光二年。立<sub>三</sub>至神道場<sub>一</sub>。神廳四年。勅

州鎮悉立<sub>三</sub>道場<sub>一</sub>。蓋帝王生<sub>三</sub>此日<sub>一</sub>也。」(大正五四 二四七中)とある。しかし、この記述について高雄義堅氏は、贊寧が生日道場と内道場を混在したためとして、内道場とはしていない。内道場を宮中の仏事修行の精舎という意味に解した場合、『僧史略』巻中にはその起源として、「大成元年春正月。詔曰。隆<sub>三</sub>建玄風<sub>一</sub>。三宝尊重。宣修闡<sub>三</sub>法化<sub>一</sub>。廣理可<sub>三</sub>歸崇<sub>一</sub>。其旧

沙門中德行清高者七人。在<sub>三</sub>政武殿西<sub>一</sub>。安置行道。此内道場之始也。」(大正五四 二四七中)とあり、北魏の廢仏後、北周末の大成元年(五七九年)に仏教復興の氣運が盛り上がった時、德行清高なる沙門七人が宮中政武殿において行道したこ

とにあるとしている。それでは、北魏に於いて内道場の性格を有するものが無かつたかという点、史料には内道場の性格を有すると思われるものが散見できる。そこで北魏に於ける内道場の前身とも言えるものが、どのような役割を担つていたのか、それを通して皇帝の仏教に対する態度と、それに対する仏教徒側の行動を見ていきたいと思います。

北魏に於いては、『魏書』釈老志に、「初法果每言、太祖明叡好<sub>レ</sub>道、即是當今如来。沙門宜<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>礼。遂常致<sub>レ</sub>拜。」とあるように、法果の「皇帝即如来」の考えに象徴されるように、既に仏教は皇帝の支配下にその存在を置くことがなされている。それは政治的権威と宗教的権威の一体化であり、国家仏教の形成といえる。

北魏を建国した道武帝(太祖、拓跋珪)は、大同に都を遷し、元興元年(三九八) 仏寺佛像の建立を命じ、仏教を国家公認の宗教として流伝した。また僧朗を敬い、礼物を送つて<sub>(1)</sub>いる。また皇始二年(三九七)には、『仏祖統紀』巻三十八

に、「皇始二年。詔趙郡法果為沙門統。帝生知信佛。初平中山所經郡國。見沙門皆致敬。禁軍旅毋得有犯。」(大正四九 三五三下)とあり、趙郡の法果に詔して、沙門統(道人統)と為し、帝は生知にして仏を信じ、初め中山を平げ、経る所の郡國に沙門を見ると敬意を致し、軍隊に仏寺を犯してはならぬと命令している。明元帝(太宗)は即位すると、太祖に遵い、黄老を好み、又仏法を尊崇し、平城及び地方に寺院と仏像を建立させ、沙門に人民の風俗を教導させている。法果に対しても崇敬すること篤く、輔國宜城子、忠信侯、安城公の号を授けている。また『魏書』(3) 積老志には、「帝常親幸其居。以門小狹、不容輿輦、更広大之。」とあるように、皇帝はいつも親しく法果の居に御幸し、その門が小狭で帝の輿輦が通れないので、門を廣大にしたようである。このことから、皇帝は法果を宮中に召するよりも、自ら訪ねていくことが多かったのではないかと思われる。このように、太宗も太祖同様に、仏教に好意的であり、僧朗や法果に対しても尊敬し、官位を与えるなど厚遇していたようである。このように、太祖、太宗の仏教政策は、道人統の法果により、仏教教団の監督に当たらせるというものであり、法果の皇帝に対する態度も、専制君主の下での教団の運営維持という点では、致し方ないものであったといえる。

太武帝は即位するや、太祖・太宗の仏教政策を受け継ぎ、

北魏の帝室と仏教(横井)

仏教に対して信仰、保護の立場をとっていた。しかし時の宰相崔浩は、自ら道教に心服していただけでなく、仏教の隆盛を快く思わず、新天師道の寇謙之と結託して、太武帝を道教へと向わせることにより、仏教を弾圧させた。太武帝の奉仏の行為としては、『冊府元龜』卷五十一に、「太武帝遵道教明元之業。每引高德沙門與共談論。於四月八日、輿諸佛像、行於広衢、帝親御門樓、臨觀散花、以礼敬。」とあり、太祖、太宗の所業に遵い、常に高德の沙門を引き入れ、共に談論をし、四月八日の仏誕節には、門樓より散華をしている。また、太武帝の誕節には、『仏祖統紀』卷三十八に、「二年。帝誕節詔於仏寺建祝壽道場。神麈元年。帝誕節詔天下仏寺並建道場。」(大正四九 三五四上)とあることから、北魏仏教が皇帝を翼賛する様子が窺える。また『仏祖統紀』卷三十八には、「延和元年初涼沙門玄高妙善禪觀。上遣使迎入平城。甚加敬重。命太子晃師事之。」(大正四九 三五四上)とあり、延和元年(四三二)の初め、涼土の沙門玄高は妙に禪觀を善くし、皇帝は使いを遣して、迎えて平城に入れ、甚だ敬重を加え、太子晃に命じて玄高に師事させている。そして太武帝の時のこととして、『仏祖歴代通載』卷八に、「魏朝元会。沙門曇始振錫至宮門。吏白太武曰。趣斬之。刃下無傷。又白。臨殿陛矣。太武抽佩劍自斬之。亦不能傷。劍微有痕如線。令収捕投虎

檻中<sup>一</sup>。虎皆怖伏不敢<sup>レ</sup>瞬。左右請以天師試<sup>レ</sup>之。虎即虓吼。太武大驚。延<sup>レ</sup>始上殿。再拜悔謝。魏書佛老志云。「(大正四九 五三八中)とあるが、このことについては、曇始の事なのか疑問ではあるが、皇帝がこのような神異僧に対して、殿に上らせ、敬う行動をしていたことが、推察できると思う。太平真君二年(四四二)に、太武帝は新天師道の寇謙之と結託した宰相崔浩の言を容れ、道教を国教と為し、廃仏の詔を下して、北魏全土にわたって苛烈な廃仏を断行した。この廃仏は、当時の仏教の墮落のほか、寇謙之の軍事に於ける神異力に対する皇帝の信任があつたようである。

文成帝が即位すると、仏教復興の詔が出され、諸州の郡県には、その地方の中心となる官立寺院が造立された。これらの寺院は北魏朝廷の統制下に置かれた寺院であり、北魏仏教は国家仏教の性格を強くすることになる。その仏教教団を統率するのが沙門統(道人統)であつた。そして師賢や曇曜が沙門統となつて活躍し、北魏仏教の全盛を迎えることとなる。『仏祖統紀』卷三十八には、「以師賢為沙門統。和平元年。詔沙門統曇曜為昭玄沙門都統。待以師禮。」(大正四九 三五四下)と記されており、和平元年(四六〇)には、沙門統曇曜に詔して、昭玄沙門都統と為し、待するに師礼を以てしたとある。

献文帝の時代には、『仏祖統紀』卷三十八に、「五年。帝雅

好<sup>二</sup>仏学<sup>一</sup>。每引朝士沙門共談玄理。有<sup>二</sup>遺世之心<sup>一</sup>。是年昭位太子。徙居崇光宮。称<sup>二</sup>上皇<sup>一</sup>。建<sup>二</sup>鹿野寺<sup>一</sup>。與<sup>二</sup>僧数百<sup>一</sup>習<sup>二</sup>学<sup>一</sup>。禅定。」(大正四九 三五五上)とあり、皇興五年(四七二)帝は雅に仏学を好み、常に朝士沙門を引いて共に玄理を談じ、遺世の心ありとしている。そして是の年詔して位を太子に伝え、崇光宮に移り、上皇と称し、鹿野寺を建て、禅僧数百と禪定を習学していたようである。この記述も、内道場の性格を持つものを、上皇となつた献文帝が、既に作つていたと言ふことが出来ると思う。

孝文帝は、北魏中興の英主とされ、親政後は急速な華化政策をとり、北族と漢族の融和をはかるために胡言胡服を禁止し、洛陽遷都を断行した。孝文帝は仏教を信奉し、羅什の徳を追慕して塔を造立したりした。『仏祖統紀』卷三十八には、「十七年。詔懿徳法師<sup>一</sup>聽<sup>二</sup>一月三入<sup>一</sup>殿。俾<sup>二</sup>朕餐<sup>一</sup>粟道味。師光朝廷。帝数幸<sup>二</sup>王園寺<sup>一</sup>。與<sup>二</sup>沙門談論<sup>一</sup>。論<sup>二</sup>大道<sup>一</sup>。」(大正四九 三五五上)とあり、大和十七年(四九三)懿徳法師に詔して一月に三度殿に入ることを聴し、皇帝をして道味を餐稟し朝廷を飾光せしめ、帝は度々王園寺に幸して、沙門と仏道を談論したようである。また孝文帝の時代には、『魏書』積老志に「時沙門道登、雅有<sup>二</sup>義業<sup>一</sup>。為<sup>二</sup>高祖眷賞<sup>一</sup>、恆侍講<sup>レ</sup>論。曾於<sup>二</sup>禁内<sup>一</sup>與<sup>二</sup>帝夜談<sup>一</sup>、同見<sup>二</sup>一鬼<sup>一</sup>。二十年卒。高祖甚悼<sup>レ</sup>惜之、詔施<sup>二</sup>帛一千匹<sup>一</sup>。又設<sup>二</sup>一切僧齋<sup>一</sup>、并命<sup>二</sup>京城<sup>一</sup>七日行

道。」とあり、沙門道登は仏教教義について詳しく、高祖に賞せられて、常に傍らに侍して論を講じていた。その道登はかつて禁内において、帝と夜談じていて、同じく鬼を見たことがあったとし、道登が天和二十年(四九六)に卒すと、高祖は甚だこれを悼惜している。また『仏祖統紀』卷三十八に、「詔四月八日迎洛京諸寺佛像入閭闔宮。受皇帝散華礼敬。歳以為常。」(大正四九 三五五中)とあり、詔して四月八日に洛京の諸寺の佛像を迎えて閭闔宮に入れ、皇帝の散華礼敬を受け、このことを毎年のことにしたようである。このように孝文帝の時には、懿徳法師や道登を宮中に入れ、仏道について談論したり、論を講じさせ、仏誕節には洛京の佛像を閭闔宮に入れ、皇帝が散華礼敬するなどしている。

宣武帝は、先の孝文帝に引き続いて仏教を信奉した。そして北魏仏教は隆盛をきわめることとなる。景明四年(五〇三)、永平元年(五〇八)のこととして、『仏祖統紀』卷三十八には、「四年。南天竺国遣使貢辟支佛牙。永平元年。詔中天竺国勒那摩堤。於大極殿訳経。北天竺国菩提流支。於紫極殿訳経。帝親預筆受。」(大正四九 三五五中)とあり、南天竺国の遣使が仏牙を献じている。また永平元年には、中天竺国の勒那摩堤に詔して、大極殿に於いて経を訳させ、北天竺国の菩提流支は紫極殿に於いて経を訳し、帝は親しく筆受に預つたようである。このことから、宮中に於いて訳経

が行われていたことが窺える。同様に『仏祖統紀』卷三十八には、「二年。帝御式乾殿講維摩経」。時西域沙門至者三千人。」(大正四九 三五五中)とあり、永平二年(五〇九)に、帝は式乾殿に御して維摩経を講じている。また『魏書』釈老志には、「世宗篤好仏理、每年常於禁中、親講経論、廣集名僧、標明義旨。沙門條録、為内起居焉。上既崇之、下彌企尚、至延昌中、天下州郡僧尼等、積有二万三千七百二十七所。徒侶逾衆。」とあり、世宗は篤く仏教の教理を好み、毎年常に禁中に於いて親しく経論を講じ、広く名僧を集め、その義旨を明らかにせしめている。沙門はこれを記録し、内起居とした。皇帝が既に仏教を尊崇したため、下の者も尚ぶようになり、延昌中に至つては、天下の州郡の僧尼寺は一万三千七百二十七所にもなり、僧侶の数も多くなつたとしている。これらのことから、宣武帝の時代には、宮中に於いて訳経が行われ、また高僧を集め経論について講じるような、内道場といえるようなものが、在つたと思われる。

孝明帝の時代には、正光元年(五二〇)のこととして、『仏祖歴代通載』卷八に、「魏正光元年孝明帝加元服。命沙門道士講道於禁中。時道士姜斌沙門曇謨最对論。」(大正四九 五四七上)とあり、元服にあたり、沙門と道士に命じて、禁

中にて道について、講じさせている。

そして、北魏以降の北朝国家に於いて、宮殿内で行われた

仏教を史料より見ていくと、東魏の時代には、『北齊書』卷二十四、杜弼の項に「六年四月八日、魏帝集名僧於頭陽殿講說仏理」、弼与吏部尚書楊愔、中書令邢邵、秘書監魏収等並侍法筵、勅弼昇師子座、当衆敷演、昭玄都僧達及僧道順並繇林之英、問難鋒至、往復数十番、莫有能屈」とあり、孝静帝は武定六年（五四八）四月八日、名僧を頭陽殿に集めて仏理を講説させている。杜弼は吏部尚書楊愔、中書令邢邵、秘書監魏収などとともに法筵に侍し、勅命により師子座に昇っている。北齊の時代の宮廷内の記述を『仏祖統紀』卷三十八より見ていくと、「天保元年。詔高僧法常入内講涅槃經。拜為国師。法師曇延。長九尺六寸。帝每召入問道。」（大正四九 三五六下）「河清二年。詔慧蔵法師於太極殿講華嚴經。」（大正四九 三五七下）といった記述が見られ、皇帝が高僧を宮中に召して、道について問うたり、涅槃經や華嚴經について講じさせるといったことを、行っていたようである。また北周の時代に於いては、同じく『仏祖統紀』卷三十八には、「四年二月。集百僚僧道於文徳殿。討論釈老同異。」「詔群臣沙門道士。於内殿博議三教。」（大正四九 三五八中）といった記述が見られ、僧侶や道士を宮中に集め、儒仏道の三教についての討論を行わせたりしていたようである。

このように、北魏の仏教を、帝室との関係及び宮中に於け

る仏教徒の行動というものから見てくると、北魏の皇帝は、道教に傾倒した太武帝を除けば、概ね仏教に好意的であったようである。北魏に於いては、皇帝により任命された沙門統等の僧官により、仏教は統制されていたようであるが、沙門統となった僧は皇帝の信任を受けており、宮中に進出することにより、当時活躍していたものと思われる。そして、宮中に召された僧は、主に経論の義解をする高僧であり、皇帝も自ら経論について講じるなど、そこで行われていた仏教は、経論の義解を中心とする貴族仏教的なものが主であったことが窺える。このことは、東魏、北齊といった北朝国家においても言えることであり、このような宮中内の仏教が、次の隋代に於いて、煬帝の東都内慧日道場につながっていくこととなるようである。

1 高雄義堅「支那内道場孝」（『龍谷史壇』一八）

2 『魏書』釈老志

3 『魏書』釈老志

〈キーワード〉 北魏、内道場

（大正大学総合佛敎研究所研究生）